

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00542

研究課題名(和文)対話の情報共有度から談話の内容と照応表現の対応関係の解明を試みる語用論的研究

研究課題名(英文) A Pragmatic Study on the Correspondence between the Content of Discourse and Anaphoric Expressions, with Special Reference to the Levels of Information Sharing among Dialogue Participants

研究代表者

西田 光一(Nishida, Koichi)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：80326454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では談話照応に関わる、代名詞、定名詞句、不定名詞句、ことわざという4種類の表現を扱い、その違いを話し手と聞き手の情報共有度から明らかにした。代名詞は、話し手と聞き手が短い文脈、最短で1文を共有する場合に使い、文法を世界に関する知識を要しない知識とすると、文法的照応をなす。以後、語用論への依存度が増し、定名詞句による照応では、話し手と聞き手が長い文脈を共有し、聞き手は文脈の流れを追って先行詞を特定する。不定名詞句による照応では、先行詞の指示対象が有する一般的な属性に関する知識の共有が必要である。ことわざによる照応には当該表現の慣習的用法の共有が必要であり、最も広く世界の知識に依存している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

照応の機能を備えた代名詞と定名詞句とは違い、不定名詞句やことわざには、それ自体には照応に関わる意味がないが、主題の指示対象を周知の事物の一例とする慣習に従い照応的に使うことができる。従来、話し手と聞き手は文法的な表現を作り、理解する人とされるだけだが、文法から導かれない慣習的用法を共有した言語使用者の集団は、単なる話し手と聞き手を離れ、言語コミュニティの市民と言える。本来、非照応的な表現を照応に転用することは、市民としての言語運用であり、照応的な不定名詞句やことわざは、当該コミュニティで等しく期待される規範を表す。本研究の社会的意義は、慣習的表現から市民が社会参加する方法に着手したことである。

研究成果の概要(英文)：This research discuss four classes of expressions used for discourse anaphora, i.e. pronouns, definite noun phrases, indefinite noun phrases and proverbs. Pronouns are grammatical anaphoric expressions where "grammatical" means that speaker and hearer can use them without the world knowledge; they can be used with the minimum context shared by speaker and hearer, possibly one sentence. The other classes of anaphoric expressions are more or less pragmatic in nature, and depend on the world knowledge. Anaphoric definites require the sharing of longer contexts between speaker and hearer, one paragraph, for example. The anaphoric use of indefinites and proverbs follows the convention by which the topic referent is seen as an instance of the well-known cases. Anaphoric indefinites are available if they express the general properties of the topic referents. Anaphoric proverbs express the role of the topic referent in the context as the one in a typical situation shared by speaker and hearer.

研究分野：言語学

キーワード：談話照応 代名詞 定名詞句 不定名詞句 ことわざ 慣習 情報共有 転用

1. 研究開始当初の背景

本研究は、英語の談話照応に関わる表現として、代名詞、定名詞句、不定名詞句、ことわざの4種類を議論した。代名詞では3人称代名詞に、不定名詞句では不定冠詞 **a(n)** が付く単数形名詞句に焦点を当てた。この4種類は、以下のとおり、先行研究での扱いが大きく違う。

- 1-1. 3人称代名詞(以下、単に代名詞)は日本語のゼロに相当し、文脈を問わず照応的に使える。照応研究では最も蓄積がある。
- 1-2. 定名詞句の照応は、主題の連続性(**topic continuity**)に文脈上の情報を追加して表す点に特徴がある。間接照応をはじめ、代名詞に次ぎ、先行研究の蓄積がある。
- 1-3. 不定名詞句に関しては、新情報を担うものと量化を受けるものが主な研究対象で、旧情報を担う部分がある照応的用法に関しては先行研究が少ない。
- 1-4. ことわざの照応的用法には先行研究がほとんどない。しかし、会話分析ではことわざの会話上の役割が着目されており、これが談話の内容を最も強く反映する照応表現である。

上記の4種類が談話照応に関わることは知られていたが、4種類間の関係は明らかではなかった。本研究では4種類が話し手と聞き手の情報共有度の違いにより階層関係をなすことを論じ、ここから各種の照応に必要な情報のタイプと4種類間の分業を明らかにしようと試みた。

2. 研究の目的

代名詞、定名詞句、不定名詞句、ことわざの順の配列には意味があり、この順に照応的用法が文法で導かれるものから、世界の知識の依存したものへと移ることを示す。これにより、文法と語用論の領域を明らかにし、4種類の照応表現の中で境界線がどこに引かれるか特定する。

ことわざの談話照応の用法は先行研究では部分的に言及されているのみで、本格的な記述研究がないため、本研究では事例収集から始め、その特徴を明らかにした。

3. 研究の方法

研究方法は基本的に文献調査であり、資料の収集と読解から用例の分類を積み重ねる。必要に応じてインフォーマント調査を入れる。特に各種の照応表現が特徴的に使われるレジスターに着目し、4種類の機能分担を特定することにした。4種類の用法に関し、話し手と聞き手はどのような情報を共有し、どのような仕組みで照応を理解するかを明らかにする。

- 3-1. 主題の連続性を談話照応の基本とすると、3人称代名詞は主題の連続性を純に近い形で表す。代名詞の照応は、話し手と聞き手が短い文脈(1文でも可)を共有するだけで先行詞が分かることが特徴である。代名詞は文法的な照応表現であり、文法は世界に関する知識を要しない知識だからである。以下、本研究成果報告書では、代名詞は議論しない。
- 3-2. 定名詞句は、話し手と聞き手が長い文脈を共有し、聞き手が文脈の流れを追うことで先行詞が分かる。特に先行詞の指示対象に関する世界の知識が必要である。この代表的な用法が以下のような **shell noun** を入れた定名詞句であり、名詞句の語義は先行文が表す状況の評価内容をなす(cf. Schmid 2000, *English Abstract Nouns as Conceptual Shells*)。

Cindy Patterson 2015 *Broken Butterfly*, Chapter 8

Mallory tried to smile, but the attempt didn't quite reach her lips.

この例では、先行の節全体が **the attempt** という名詞句に要約されている。**the move** や **the trouble** といった定名詞句にも節(もっと大きくパラグラフ)を1つに要約する機能がある。このように先行文を要約する定名詞句は、ことわざの照応的用法と共通したところがある。

- 3-3. 不定名詞句の照応的用法は、主題の指示対象に一般化の意味を足して主題の連続性を表す。そのため、聞き手は主題と同じ属性を持つ指示対象に関する一般的な知識を必要とし、主題の指示対象をその一般化の一例として見るように促される。次の例が該当する。

Paula Marantz Cohen 2016, *Beatrice Bunson's Guide to Romeo and Juliet*, pp.76-77

Lately, Bea hadn't gone with her mother to The Pines because it was depressing to sit there while her mother and her grandmother talked about how her grandfather was doing – and have them look sad and sometimes cry together. A 14-year-old didn't want to deal with that.

上記の談話では主題の **Bea** を **a 14-year-old** が受けるが、これは **Bea** 個人に限られたことではなく、14歳の子に一般的に当てはまることとして話が続く。これは、慣習上、**AN INSTANCE OF THE WELL-KNOWN CASES** という解釈のもとで不定名詞句が談話照応

に資することを意味する。これは不定名詞句の総称的用法と基本的に同じであり、**a(n)**が付く不定名詞句の本来の機能を指示よりも属性表現とする考え方でもある。

- 3-4. ことわざの照応用法は、次の談話における **every dog has his day** のように、主題の指示対象に関連して使われ、主題が置かれた状況に教訓を与えるものが該当する。

Pete Dexter 2011, Spooner, p.200

And years passed by, and Spooner got taller and older and smarter but showed no improvement in regard to common sense and watching where he stepped, but every dog has his day, and on this day he stepped into the editorial offices of the Ft. Lauderdale Sun-Sentinel and fifteen minutes later he was a reporter.

この例では、**every dog has his day** は主題の **Spooner** が置かれた状況を表し、長く目立たない立場だった人が、ある日突然、活躍の場を得たといった含意が得られる。言い換えると、この文脈での **Spooner** の役割は **every dog has his day** が表す教訓的な状況の一例であり、**AN INSTANCE OF THE WELL-KNOWN CASES** という慣習的解釈のもとで談話照応が成立する点では、上で見た不定名詞句と同じ種類の照応が先行詞との間に成り立つ。

不定名詞句は **a(n) N** という不定冠詞付きの名詞句の形式で一定しているのに対し、ことわざは、主語名詞句の形式を見るだけでも、上例のように量化を受けた名詞句に加え、**the early bird catches the worm** のような定名詞句、**one swallow does not make a summer** のような数詞の不定名詞句、**you can't have your cake and eat it too** のような 2 人称代名詞、**Rome was not built in a day** のような固有名詞と、多岐にわたる。ただし、いずれの形式に対しても **AN INSTANCE OF THE WELL-KNOWN CASES** という解釈から談話照応が成立する。

不定冠詞付きの単数形名詞句のように一定の形式に一定の解釈が推論で与えられる場合は、**Grice** の会話の公理でいう一般化された会話の含意として談話照応を扱うことが可能だが、ことわざは多様な形式に一定の解釈が推論で与えられるため、**Grice** 的な扱いが難しい。後述のように、ことわざでは話し手が **Goffman** の言う発話の産出フォーマットにおいて共通の資格を得る点に **AN INSTANCE OF THE WELL-KNOWN CASES** という解釈の根拠が見出される。

4. 研究成果

話し手と聞き手の情報共有の内容が違う 4 種類の照応表現の比較から文法と語用論の領域を明らかにし、境界線の特定を試みた。

Bolinger 1972, Degree Words で既に指摘されているとおり、以下の例で **the lineman** のような客観的な内容の定名詞句は **John** を受けませんが、**the idiot** などの話し手による評価的な意味の定名詞句は代名詞に近く、**John** を受ける照応的用法がある。下記の例は同書 p.303 より。

I told John of the danger, but {the idiot/*the lineman} paid no attention.

この区別は広く知られているが、その理由は明らかになっていない。基本的なことだが、代名詞は格変化により文法的役割を先行詞に与える。例えば、主格の **he** は先行詞に主語の役割を与える。この点で評価的な定名詞句は代名詞と共通した部分がある。例えば、**the idiot** は先行詞の指示対象が行為者として遂行したことが愚かという評価であり、間接的に先行詞に意味役割と文法的役割を与えている。また、世界に関する知識は使わなくても、**John** が注意を払わなかったのが愚かということは聞き手にも分かる。つまり、評価的定名詞句は代名詞と同じく、聞き手の文法知識に依存するだけで使える。しかし、客観的な内容の **the lineman** は、その名詞句からは先行詞に文法的役割が与えられず、そのため、照応的に使える文脈に限られるわけである。

もちろん、主観的评价の意味がない定名詞句にも照応的用法がある。記述内容が豊かな特定化の照応表現(**specifying anaphor**)はその代表であり、報道のレジスターに特徴的である。

Stephen Tapert 2019, Best Actress: The History of Oscar®-Winning Women, p.446

By the time Blanchett finally captured the Best Actress Oscar for her performance in Blue Jasmine (2013), the 44-year-old actress had amassed a stunning array of chameleon-like portrayals that is only eclipsed in modern times by the likes of Meryl Streep.

この例で、**the 44-year-old actress** は **Blanchett** を受けるという解釈は聞き手の世界の知識に依存している。特定化の照応表現は分布が主語位置に偏り、それ自体が照応的機能を担うというより、主題に位置することで先行文脈と接続しており、主題に付随した照応的機能と言える。

ここから、照応に関するかぎり、文法と語用論の境界線は語類に応じているというよりは、定名詞句の内側にあり、**the idiot** のような評価的定名詞句は文法寄り、3-2.の要約的定名詞句や上記の **the 44-year old actress** のような特定化の照応表現は語用論寄りである。

英語の代名詞から定名詞句の照応に関する諸用法に関しては、その概説を「英語の談話照応における代名詞と定名詞句の機能分担」としてまとめ、『話し手・聞き手と言語表現：語用論と文

法の接点』吉田幸治（編著）の第 5 章として 2023 年 8 月に開拓社から刊行される予定である。

Grice の会話の公理の中では、要約的定名詞句は **Manner** に従い、先行文脈を簡潔に表し、特定化の照応表現は **Quantity** に従い、主題を特定する情報量を可能な限り増やしている。

ただし、語用論寄りの照応表現を全て **Grice** の会話の公理で説明するのは無理がある。ことわざは、文字通りの意味に関しては **Quantity, Quality, Relation, Manner** のいずれの公理にも該当せず、どの文脈で使っても、公理違反になるだけだからである。3-4 の例では、**every dog has his day** は、先行文脈に十分な情報を提供するわけでもなく、真実かどうかとも関連性も定かではなく、これが何の話かも不明瞭である。ことわざは文字通りの意味が希薄化しているため、その照応的用法にも、発話の文字通りの意味で公理に違反したところから、言外の意味を会話の含意として導くという方法が適用できない。**Grice** の枠組み以外にも含意を導く方法が求められる。

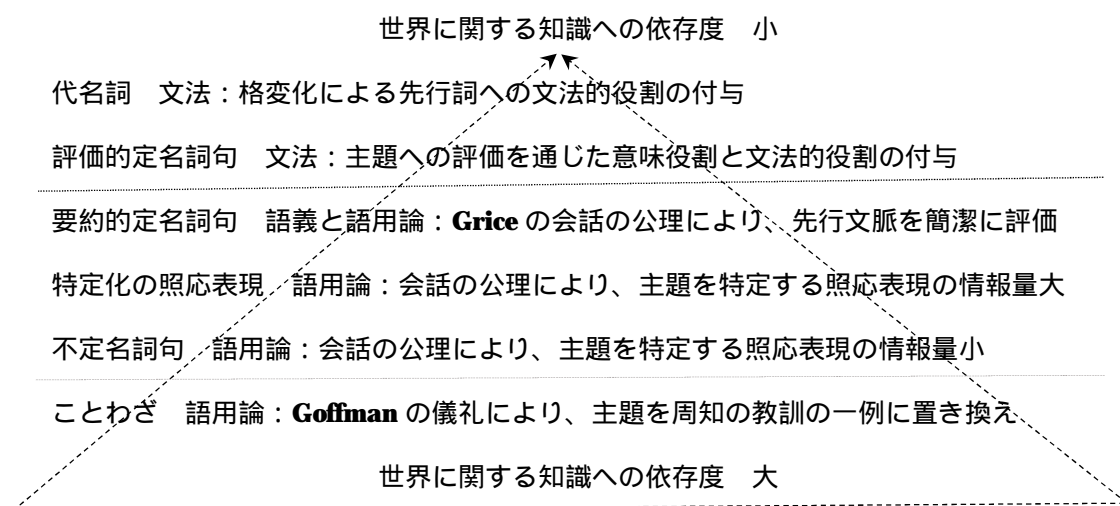
照応的用法のことわざと要約的定名詞句はともに主題の指示表現を含む先行文脈を受ける。ただし、要約的定名詞句は先行文脈を 1 つの概念に収めるが、ことわざは先行文脈を文字通りの意味に収めるわけではなく、メタファーとして先行文脈を周知の教訓に置き換える。

Grice の会話の公理は、慣習化したことばの用法が言語形式と対応する範囲では有効である。そのため、要約的定名詞句から特定化の照応表現、不定名詞句の照応的用法まではカバーできるが、言語形式と対応しないことわざの照応的用法には有効ではない。むしろ、これは社会的慣習に属し、**Goffman 1967, Interaction Ritual** で言う儀礼に関する知見が役に立つ。

Goffman 1981, Forms of Talk の発話の産出フォーマット (**production format**) を援用すると、ことわざの話し手は自分で自分のことばを作っておらず、よく知られたことばを引用しているだけなので、**Animator, Author, Principal** という話し手の 3 つの役割のうち、**Author** を欠いている。これは儀礼的な発話の特徴である。儀礼の主催者は、有名なことばを繰り返し使い、その参加者に等しい地位を与える。つまり、儀礼的な定型表現を使うこと自体に、その指示対象に **AN INSTANCE OF THE WELL-KNOWN CASES** という解釈を与える効果がある。

Goffman の儀礼は、私たち市民が作り、保とうとしている世界に関わる慣習的規範を扱っている。それは、世界の知識に依存したことわざの照応的用法の基盤をなすものである。

本研究で扱った照応表現は、下記の階層関係をなす。



照応表現の範囲が拡張するのに伴い、語用論が取り込むべきアイデアも **Grice** 的なことばの慣習から **Goffman** 的な社会慣習へと内容が変わっていく。他の照応表現とは違い、ことわざを共有する話し手と聞き手は社会の規範に則すことを確認するというメリットを享受する。

儀礼に基づくことばの用法は、話し手と聞き手の理解にも変革をもたらす。従来の言語研究では、話し手と聞き手のことを文法的に適切な表現を作り、理解する人という単純な内容でしか考えてこなかった。しかし、ことわざを談話照応で使うには文法の共有だけでは不足し、文化的背景の共有が必要である。言い換えると、ことわざのような慣習ベースの定型表現は市民のことばであり、言語使用者が当該言語コミュニティで市民として社会参加する際の手段である。

上記の配列からは、文法に世界の知識が足されていくと、やがて語用論に至るのか、または世界の知識が記号化していくと文法に収斂するのかという 2 つの方向が考えられる。ここでは、ことわざのことばの意味が無化していく過程が文法への記号化と合致するという見込みがある。

文法への依存度が強い表現は言語個別性も高い。そのため、代名詞の文法は個々の言語に固有である。一方、世界の知識への依存度が強い表現は、言語間で共通する用法になる見込みも高い。もっとも、ことわざは文化固有なので、英語の **The early bird catches the worm.** と日本語の「早起きは三文の得」は直訳の関係にはない。それでも両者には談話上、等価の用法がある。

鍋島 2002, 「**Generic is Specific** はメタファーか」は、日本語の「井の中の蛙」とタイ語の **kob nai kala** 'frog in coconut' ということわざは文字通りの意味では違うが、「小さな社会にいて外の

世界を知らず、自分はえらいと思いついでいる自信過剰な人物」を表す点で同じでもあると指摘している。この 2 つのことわざから得られる教訓は同じである。文字通りには違う意味のことわざの「同義性」は言外の意味の一種だが、**Grice** 的な会話の含意ではない。これは、ことばが違っても同種の儀礼が遂行される結果であり、定型表現で反復可能な儀礼の対象に与えられる **AN INSTANCE OF THE WELL-KNOWN CASES** という解釈も儀礼ベースの含意である。

文法化・語用論化の研究では、名詞句、動詞句、前置詞句といった語彙的な表現の本来の意味が薄れ、形式が固定化し、機能語に転じる過程が議論されている。英語の談話標識の **nevertheless (nonetheless)** のように統語的構成素に合わない省略的な配列で固定化することもある。

ことわざにも **Like will to like.** のように文法的に破格の単語の配列になるものがあり、文のレベルでも文法化・語用論化が生じている可能性がある。教訓的な内容の文がことわざとして定着し、その形で固定化し、元の意味が薄れていくと、文脈上の主題をその教訓の一例として表すように談話機能が特化すると見込まれる。本格的な検証は今後の研究に委ねるが、これは、ことわざが機能語の代名詞に近づくということである。上記の階層の底辺から上に、定型表現の語用論から代名詞の文法への収斂という慣習の定式化と、底辺よりさらに広く定型表現の儀礼による市民の社会参加という言語研究から社会に出ていく実践的応用の 2 つの方向を発展させたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西田光一	4. 巻 24
2. 論文標題 [書評] Miyuki Nagatsuji, The Pragmatics of Clausal Conjunction (Hituzi Linguistics in English No. 33), 2021, Tokyo: Hituzi Syobo, xii+160p., ISBN 978-4-8234-1069-7	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 146-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Nishida	4. 巻 39
2. 論文標題 Remarks on the Partial Pronominal Use of Proverbs in English and the "Simulation Effects" of Generic Pronouns and Clausal Generic Expressions	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JELS, the English Linguistic Society of Japan	6. 最初と最後の頁 182-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田光一	4. 巻 28
2. 論文標題 英語の怠惰代名詞に課せられる形式的制約の理由	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語語法文法研究	6. 最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Nishida	4. 巻 40
2. 論文標題 Two Types of Proverbs and Self-Reference in Terms of Normative Expressions	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 65-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林炫情, 田中菜採, 西田光一, スワンソン・マーク	4. 巻 第14号 (通巻第27号)
2. 論文標題 山口県立大学国際文化学科における言語教育職養成の現状と今後の課題について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口県立大学学術情報〔国際文化学部紀要〕	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西田光一	4. 巻 26
2. 論文標題 英語の広告における定名詞句の表現効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語語法文法研究	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田光一	4. 巻 20
2. 論文標題 談話内のことわざの代用機能とグライスの協調の原理の再評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 41-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Nishida	4. 巻 44
2. 論文標題 An anaphora-based review of the grammar/pragmatics division of labor	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PROCEEDINGS OF THE FORTY-FOURTH ANNUAL MEETING OF THE BERKELEY LINGUISTICS SOCIETY (BLS 44)	6. 最初と最後の頁 213-227
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Nishida	4. 巻 6
2. 論文標題 Authentic English is Beneficial and Enjoyable	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CLIL in ACTION: Content and Language Integrated Learning in Intercultural Studies, YPU Active Learning Handbook	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Koichi Nishida
2. 発表標題 Two Types of Proverbs and the Floor Holder 's Self-Expression
3. 学会等名 5th International Conference of the American Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Koichi Nishida
2. 発表標題 Remarks on the Partial Pronominal Use of Proverbs in English and the "Simulation Effects" of Generic Pronouns and Clausal Generic Expressions
3. 学会等名 The English Linguistic Society of Japan 14th International Spring Forum (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Nishida
2. 発表標題 Addressee-Based Considerate Expressions in English
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 牧原功、西田光一
2. 発表標題 配慮表現に関わるテンスの日英対照
3. 学会等名 日本語用論学会第24回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Nishida
2. 発表標題 Remarks on the Partial Pronominal Use of Proverbs in English and the “Simulation Effects” of Generic Pronouns and Clausal Generic Expressions
3. 学会等名 The English Linguistic Society of Japan 14th International Spring Forum, May 9, online (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Nishida
2. 発表標題 Figurative Expressions in Context as Cases of Identity-of-sense Anaphora
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference, The Hong Kong Polytechnic University, 11 June 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田光一
2. 発表標題 英語の広告における定名詞句の表現効果
3. 学会等名 第26回英語語法文法学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koichi Nishida
2. 発表標題 Proverbs as proforms of evaluative utterances
3. 学会等名 The 4th International Conference of the American Pragmatics Association (AMPRA IV) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西田光一
2. 発表標題 グライスの語用論の射程と可能性
3. 学会等名 日本語用論学会第21回大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Figurative Expressions in Context as Cases of Identity-of-sense Anaphora
2. 発表標題 Koichi Nishida
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 名嶋義直 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 356
3. 書名 リスクコミュニケーション：排除の言説から共生の対話へ	

1. 著者名 田中廣明, 秦かおり, 吉田悦子, 山口征孝(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 276
3. 書名 動的語用論の構築へ向けて 第2巻	

1. 著者名 山岡政紀、牧原 功、金 玉任、大和啓子、塩田雄大、斉藤幸一、小野正樹、三宅和子、西田光一、李 奇楠、Lina Abdelhameed ALI、岩崎 透、UMAROVA Munojot	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお	5. 総ページ数 254
3. 書名 日本語配慮表現の原理と諸相	

〔産業財産権〕

〔その他〕

公立大学法人 山口県立大学研究者データベース 西田光一 https://portal.ypu.jp/kg/html/japanese/researchersHtml/110374/110374_Researcher.html 山口県立大学研究者データベース 西田光一 https://portal.ypu.jp/kg/html/japanese/researchersHtml/110374/110374_Researcher.html 国際文化学の再設計：異文化理解と多文化共生のための教育実践 https://www.yamaguchi-ebooks.jp/?bookinfo=yamadaiseika202005120840 山口県立大学研究者データベース、西田光一 https://portal.ypu.jp/kg/html/japanese/researchersHtml/110374/110374_Researcher.html

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------